

特別講演

ことばと声

——Dolbeau Sermon 293A, Mainz における——

この論考を故 Peter Brown 先生に献げる

加藤 武

緒論：Dolbeau 説教の新発見

ドルボー (François Dolbeau) は 1995 年、Mainz 市立図書館のカタログにおいてアウグスティヌスの真正な説教二七篇 (以下、全体を『ドルボー説教』と呼ぶ) を含む大量の説教を発見し、世界のアウグスティヌス研究者は驚きと歓喜とをもってこれを迎え、『アフリカの民衆への二六箇の説教』 (*Vingt-six Sermons au Peuple d'Afrique*, éditées par François Dolbeau, Paris, 1996) を編集し、出版した。増補版が 2010 年に、2020 年には Dolbeau/Dutie 指導による校訂版と綿密な注釈を収める *Sermons Dolbeau 1-10* が BA77/A として刊行された。

ピーター・ブラウン (P. Brown) は新説教の発見に加わった。いわゆる『ディヴジャック (Divjak) 書簡』とそれに続く『ドルボー説教』の発見の効果を「テープレコーダーに残された、ずっと昔の友人の声を呼び覚ます」ものとして捉えるドルボーに共鳴し、あたかも幾久しく途絶えていたアウグスティヌスの肉声をまぢかに聞くかのような鮮烈な印象をもった。¹⁾

1) Peter Brown, *Augustine of Hippo, A Biography*, Berkeley/Los Angeles, 1967, 2004².

第 1 章：いつ、どこで

ドルポーは、『ドルポー説教』293A (Mainz7) = 『ドルポー説教』3 (De nativitatis die sancti Iohannis Baptistae et de voce et verbo) が、洗礼者ヨハネの誕生日の祝日、407年6月24日に話されたとする(ドルポー前掲書 p. 471, なお本論考はこれに依拠)。

では、『ドルポー説教』3 (293A) は、北アフリカのどこの教会で語られたか。ドルポーは、当日の説教の主題が説教を聞いた聴衆には抽象的で難解であることと、教区外の教会から招聘されていると見られるという二点から、ヒッポの教会ではないと見る (*Ibid.* p. 477)。しかしラ・ボナルディエール (Anne-Marie La Bonnardière) は、406年12月の初旬と407年の過越の祭の終わりの間に連続説教がなされ、その間の説教が、一連のものである『詩編講解』(*Enarrationes in Psalmos*) 119-133, 『ヨハネによる福音書講解』(*Tractatus in Ionannis Evangelium*) 33の冒頭と『パルティア人宛ヨハネ書簡(ヨハネ第一書簡)講解』(*Tractatus in Iohannis Epistulam ad Parthos*) を含むことから、聖母昇天の祝日のあと5月24日までアウグスティヌスが司牧するヒッポの教会に滞在した、と見る (*Recherches de Chronologie Augustinienne*, Paris, 1965)。

ラ・ボナルディエールの406-407年説を踏まえて、『ドルポー説教』3(乙と呼ぶ)とそれと同時期に語られた『ヨハネによる福音書講解』1, 8(甲と呼ぶ)を比較しよう。

甲：『ヨハネによる福音書講解』I, 8

Deus (神) とわたしが言うとき、わたしはことばを告げる。これは何と短いことばだろう。四文字と二音節だけである。いったい、この四文字・二音節の全体が神なのだろうか。それとも、これが取るにたならぬものであればあるだけ、それによって理解されるものは貴重であるということだろうか。(泉治典訳)

乙：『ドルポー説教』3, 8

わたしがこれが Deus (神) ですと言ったときこの四文字このすべては二個の音節です。いったいあの廣大無辺の力が、こんな二音節にかざられるのですか。(加藤武訳、以下、訳者名を記さない場合は、加藤訳)

甲は二個の音節とそれが象徴する《理解されるものの尊さ》を比較し、乙は四個の文字と二個の音節からなる語とそれが象徴する思想内容である《廣大無辺な力》を比較する。アウグスティヌスにおいて単語 *verbum* は、釣りをする際のブイの役目に似ている。ふとブイが沈む、途端に釣り糸を引きあげると、銀色の鱗の魚が空中に踊っている。小さな単語のブイが大きい思想内容をひきだす。(単語から思想内容に遡るこの方法は、コンテキストから語の意味に遡る欧米の言語学のそれとはまったく異なる。) 甲と乙とは酷似している。甲と乙は同日中か、あるいはせいぜい数日をおいて語られた、と筆者は見る。

第2章：心のことば

『ドルポー説教』3,6において言う。

兄弟の皆様。ことばとは何であると思いますか。あの神のコトバは省きましょう。最下位から最上位へと、類似 *similitudo* のある段階をとらえることができるなら、すこし考えましょう。……それを語るのでなければ、誰がそれを考えるに値するでしょうか。その栄光、言い尽くしがたい永遠、父と等しい永遠はすこし脇に置きましょう。信じることによって見ることができるようになるために、見ていないものを信じましょう。……いったいあなたの耳に響くもの、これがことばだとわれわれはまだ思っているのでしょうか。ことばとはあなたが言いたいと欲するものです。あなたは言いたいと欲するあるもの *aliquid* を心の中に妊娠しました *concepisti*。あなたがあなたの心の中に妊娠した考えそのもの *ipsa conceptio* は、すでにあなたの心の中でことばになりました。あなたが言おうと試みたものをすでにあなたは知っており、あなたの手もとで *apud te* 言われたのです。

アウグスティヌスの《思想の心臓部》ともいうべき《心のことば *verbum corde*》がここに登場する。『ドルポー説教』3を、6節、7節、8節と進むにつれて理解が深まる。

トマスはアウグスティヌスに学び、ことばを、製品を作り出す職人の

喩えを借りて三段階で説明した。²⁾

『ドルボー説教』3,7で言う。

……あなたがそれを言うために、あなたの心に妊娠したもの、あなたが言おうとするものそのもの、言われるために心に孕まれたもの、それがことばです。

心に《妊娠する》であって、単に《思い浮かべる、思案する》ではない。

……だからあなたの心に妊娠したことば *verbum* は、あらゆる音声 *voces* に先立ち、あらゆる音声よりも前にあったのです。ギリシャ語よりも、ラテン語よりも、ヘブライ語よりも、フェニキア語よりも先にありましたし、あらゆる言語、およそ地球上にあるどの音声よりも、かの心のことばは先にありました……。ここには大いなる秘義があります。さらに、もしあなたが完全に沈黙したならば、あなたの心の中にあることばは、生き続けていないのでしょうか。もし話す相手がいなかったなら、あなたが心の中で考えたことはあなたの精神にあきらかであるのではないのでしょうか。しかもいかなる言語の相違もなしに、単一なる知識によって。

心のことばは、あらゆる音声、いかなる言語にも先立つ。末尾の《単一なる知識によって *in simpliciter scientia*》とは、精神 *mens* が自己の精神に現前していることをさす。アウグスティヌスはプロティノスの思想の継承者である。³⁾

『三位一体論』15, 10, 19において言う。以下、『三位一体論』第15巻からの引用は、加藤信朗・上村直樹訳による（一部表記を変更）。⁴⁾

2) 津崎幸子『トマス・アクィナスの言語哲学』、創文社、1997年。

3) *Sermons Dolbeau 1-10*, sous la direction de F. Dolbeau et M. Dulaey avec une équipe de chercheurs, Œuvres de saint Augustine, 77/A, Paris, 2020, p. 140, note 39.

4) 加藤信朗・上村直樹訳『三位一体論』（『中世思想原典集成』4、平凡社、1999年、

それゆえ、音として響く以前のことばを、いやさらにそれより遡って、その音の響きの似姿が思考の働きによって、[心の奥底で]思い巡らされる以前のことばを理解しうる人はどんな人であっても——というのは、このことばはいかなる言語にも、すなわちわたしたちのラテン語がそのひとつである諸国民のいかなる言語にも属さないものですから——わたしはあえて申します、このことばを理解できる人はどんな人であっても、「初めにことばがあった。ことばは神と共にあった。ことばは神であった」(ヨハネによる福音書 1: 1) と述べられているそのことばに類似した何ものかを、この鏡を通して、この謎のうちに見る事がもうできるのです。

《思い巡らされて *volvuntur*》を直訳すると《転がされる》。反転しつつ熟考することを言う。「諸国民のいかなる言語 *lingua* にも属さない」ことばとは《心のことば》に他ならない。「このことばを理解できる人は」、 「初めにことばがあった……」に類似したなものか、すなわち神を、まだ直視できなくてうすぼんやりとであろうとも、「見る事がもうできるのです」と言う。ここで謎 *aenigma* とは寓意を言う。

『三位一体論』 15, 11, 20 において言う。三つのパラグラフに沿って考察する。

それゆえ、人は人間のあのことばにまで至らなければなりません。それは分別の働きをそなえた生き物である人間のことばです。それは音声として発せられるものでも、また音声による類似像としてわたしたちの内部に思考されるものでもありません。音声として発せられるもの、または、音声による類似像としてわたしたちの内部に思考されるものは必然に一定の国語に属するものです。そういうものとは違って、そのことばはそれによってことばが言い表されるすべての記号に先立つもので、心のうちに保たれている知識から、この知識がわたしたちの内部であるがままに言い表される時、

生まれてくるものです。【パラグラフ 1】

記号 *signum* に先立つことばは、「心のうちに保たれている知識から、この知識がわたしたちの内部であるがままに言い表される時、生まれてくるもの」であると定義される。

というのは、思考の働きの見られた姿は知識の見られた姿にこの上なく類似しているのですから。なぜなら、音声、または、何らかの物的な記号を通じてことばが述べられる場合、〔ことばにより述べられるものの〕あるがままに語られているではありません。物体を通じて見られたり聞かれたりされうるような仕方で語られているのです。【パラグラフ 2 (承前)】

記号に先立つ言語は、音声言語に属さない。

それゆえ、知のうちにあるものがそのままことばのうちにある場合、そのとき、真なることばがあり、人間によって待ち望まれているがままの真実そのもの (*veritas*)、すなわち、「あのもののうちにあるものがそのまま、このもののうちにもあり、あのもののうちにはないものは、このもののうちにもない」ということが成り立つのです。ここに、「然り、然り、否、否」(マタイによる福音書 5: 37) ということが認められます。このようにして、作られた似姿の類似性は、可能なかぎり、あの生まれた似姿の類似性に近づいてゆきます。この生まれた似姿の類似性により、子である神は父にすべての点で実体的に似ていると宣言されるのです。(同上、傍点は筆者) 【パラグラフ 3】

では知 (*notitia*) とはなにか。『三位一体論』9, 11, 16 で、「知 *notitia* はそれが知るものとの類似性 *similitudo* を持っている」と言う。では知 *notitia* はことば *verbum* でもあるのか。パラグラフ 3 の始めにおいて、「知のうちにあるものがそのままことばのうちにある場合、その時、真なることばがある」と言う。知は真(まこと)のことば *verbum verum*

である。

『創世記について、マニ教論駁』 *De Genesi contra Manichaeos*, 2, 24, 37で言う。

キリストは（アダム）は父のもとを去り、この世に来た。……しかし神（キリスト）は場所 (locus) に制約されない。……（彼は）神のもとを離れ、人として人々の間に住んだ……。

ここでは、受肉した神のことばについて述べている。これは、それまで神のことばは知恵 *sapientia* と同一視され、*cosmos noetos* や *nous* と同一視され、さらに神のことば *Verbum Dei*（ヨハネによる福音書 1: 1）と同じであると見られていたことを思うとき、この転換の意味は大きい。

ジョンソン (D. W. Johnson) によると、この箇所はアウグスティヌスが新プラトン派的な *nous* に相当する知恵 *sapientia* ではなく、知恵 *Sapientia*、すなわち神のことばを大文字のことば *Verbum Dei* として理解した最初の箇所である。⁵⁾

コメント (1) : 『キリスト教の教え』 1, 12, 13 (加藤武訳, p. 41) では、神のことば *Verbum Dei* が知恵 *Sapientia* とよばれているが、そこでいう知恵は新プラトン派的な意味でなく、受肉したことば *verbum incarnatum* を意味し、これは、後に『創世記について、マニ教を論駁する創世記注解』 2, 24, 37で、「キリストはご自身を無とした」(フィリピの信徒への手紙 2: 7) と言われることの前取りである。

コメント (2) : 『キリスト教の教え』前掲箇所において、「心に抱くもの *id quod animo gerimus*」が、その先で「心に抱くことば *verbum quod corde gestamus*」と言い換えられる。

コメント (3) : 『三位一体』 15, 10, 18において、受肉 *incarnatio* は語り *locutio* と言い換えられ、語り *locutio* は思考 *cogitatio* と言い換えられ、さらに思考は心の語り *locutio cordis* と言い換えられる。後期における受肉理解の深まりをここに見る。

コメント (4) : 《心に抱くことば》と《声、すなわち音声》の関係、

5) Douglas W. Johnson, *Verbum in the Early Augustine*, Oxford 1972, p. 27.

《意味》と《音声》の連関を受肉に基づいてとらえている。

コメント (5) : 《ドウックロウ (Ulrich Duckrow) によると、《心のことば》は「神の真理啓示 Wahrheitsoffenbarung Gottes にたいする全人間の応答 Antwort des ganzen Menschen である」。⁶⁾

第 3 章

第 3 章 1 節：音声の価値

『説教』 28, 5 において言う。

いいですか。わたしはじっさい音声を発します。音声を発したら、もう戻せないのです。でもだれかに聞いてもらいたいのであれば、別の音声を発し、それが過ぎ去ったら、別の音声を発するか、あるいは沈黙を従えます。意味をあなたに対して発しますが、意味をわたしの許に把握しています。あなたはあなたが聞いたことを見いただけますが、わたしが言ったことをわたしが失うことはありません。

この説教は 397 年 5 月 27 日に語られた初期の説教に属する。意味と音声との関係について特記すべき点を列挙しよう。

1) 意味 intellectus はわたしの心に留っているが manens in corde meo ……、音声 sonus は過ぎ去った transierit。『説教』 28, 5 では、過ぎ去る音声と留まる意味が対比される。『ドルボー説教』 3, 11 で、過ぎ去る音声と持続する意味が対比される。意味の音声に対する優越性は明瞭である。

2) 音声はことば (intellectus, 意味) という主人を載せて下僕が運ぶ、いわば乗り物 quasi vehiculum である、と言う (『ドルボー説教』 3, 9, 『説教』 119,7 及び 288,4)。

3) 意味は音声 (声) をうけとる assumo sonum。ことばは音声を自らに付け加える sibi addidit (同上)。

音声はことばに付属する。意味 (ことば) の音声に対する優位は明ら

6) Ulrich Duchrow, *Sprachverständnis und Biblisches Hören bei Augustin*, Tübingen, 1965, S.145.

かである。

『ドルボー説教』3, 11において言う。

その二つの音節 (de-us) は自らの任務を果たして過ぎ去りました。でもわたしが心に孕んだかものは過ぎ去りませんでした。それはわたしの内にあり、二つの音節が語られた後にも、わたしの中に留まりました。そしてその二音節があなたの耳に触れたとき、あなたの心のなかで思考 *cogitatio* に属するものとなったものは、その二つの音節が過ぎ去った後もあなたの心の中に留まったのです。

持続する意味 (ことば) の、消失する音声に対する優位は、ここでも明らかである。

『ヨハネによる福音書講解』1, 8において言う。

およそ語られそして過ぎ去って行くものは音声であり、文字であり、音節である。音声となって響くことばは過ぎ去って行く。しかし、音声によって意味され、語った人の思考の中にあり、聞いた人の理性の中にあるものは、音声過ぎ去って行くときもとどまっているのである。(泉治典訳)

響いて消え去る音声 *sonus, vox* に対して、持続する思惟 *cogitatio* が対比的に語られている。

『ドルボー説教』3, 9 (引用8) において言う。

ですから音声よりも前に、ことばが孕まれました。ことばは、それに乗ってあなたに到達するいわば乗り物 *vehiculum* のように、音声を自分自身につけ加えました。

『説教』288, 4 (401年) では乗り物を《声 *vox*》、《肉 *sarcus*》と言い換え、受肉との類比で捉えている。シントラー (Alfred Schindler) による

と乗り物の比喩は 27 回登場する⁷⁾。単なる道具・媒体と捉える域を超えている。

『三位一体』 15, 10, 20 において言われていた。

それゆえ、知のうちにあるものがそのままことばのうちにある場合、そのとき、真なることばがあり、人間によって待ち望まれているがままの真実そのもの (veritas)、すなわち、「あのものうちにあるものがそのまま、このものうちにもあり、あのものうちにはないものは、このものうちにもない」ということが成り立つのです。ここに、「然り、然り、否、否」(マタイによる福音書 5: 37) ということが認められます。

ドゥックロウによると、これは人間の問いに対する神の応答 Verantwortung である。⁸⁾

第 3 章 2 節：音声の構造

『ヨハネによる福音書講解』 1, 8 において言う。

生きていて、永遠にあり、全能で、無限で、至る所に現在し、至る所で全体であって決して閉じ込められることのない実体を考えるとき、あなたの心の中にあるそれはいったい何であろうか。あなたがこれらの諸性質を考えると、それはあなたの心の中にある神についてのことばなのである。……音声となって響くことばは過ぎ去って行く。しかし、音声によって意味され、語った人の思考の中にあり、聞いた人の理性の中にあるものは、音声が過ぎ去って行くときもとどまっているのである。(泉治典訳)

過ぎ去る音声と留まる意味を比較する。ここでことばの音声に対する優位は明らかである(本章の前節を参照)。

7) Alfred Schindler, *Wort und Analogie in Augustins Trinitätslehre*, Tübingen, 1965, Anhang II, Das "innere" Wort-terminologisch betrachtet, SS. 251-252.

8) U. Duchrow, *ibid.*

次に、『問答法』 *De dialectica* におけることばと音声に関するストア派的な考えを見よう。『問答法』5において言う。訳は須藤英幸による。

それゆえ、(ある) ことば *uerbum* が口から発せられるとき、もし、自からのために、すなわち、ことばそれ自体をめぐって、なにかが問われたり論考されたりするために発せられるのであれば、確かに論考や問いの主題が事柄 *res* であって、この事柄それ自体が、「ことば」と呼ばれる。しかしながら、耳ではなく魂がことばから知覚し、魂それ自体によって保持される内容はなんであれ、「口述可能なもの *dicibile*」と呼ばれる。(須藤英幸訳、一部変更)⁹⁾

『問答法』については、水落健治の数多くの論考がある。

ストア派は感覚と精神を峻別する。《*dicibile*》はストア派の *logike phantasia*, レクトン *lekton* に相当する。¹⁰⁾

レクトンについて。

ストア派の重要な教説に三個の緊密に組み合わされた観念がある。

- 1) シニフィアン, *semainon*, 音声 *sonus, vox*
- 2) シニフィエ, *semainomenon*, 音声によって示されたもの *dicibile*
- 3) プラエグマ, われわれの思想と独立に存在するもの *res*
- 4) テュンカノン, 外に存在するもの

『問答法』5において, *dictio* は単なる意味のない《音声 *lexis, phone*》でなく, 《分節された音声 *vox articulata*》であり, 《意味のある音声 *lexis semantike*》である。アウグスティヌスはストア派の音声理解を, *Cicero, Academica* を通じて受容している。「人は(音声の)言語 *Wort* に対するある補足性に注目する」と, リュフ (Hans Ruef) は『問答法』の詳細な注解のなかで述べている¹¹⁾。ペパン (Jean Pépin) は, 心のことば

9) 須藤英幸, 「記号」と「言語」——アウグスティヌスの聖書解釈学, 京都大学学術出版会, 2016年, p. 91。

10) セクストス・エンペイリコス, 金山弥平・金山万理子訳『ピュロン主義哲学の概要』2,80-81, 京都大学学術出版会, 1998年, pp. 167-168。

11) Hans Ruef, *Augustin über Semiotik und Sprache, Sprachtheoretische Analysen zu Augustins Schrift 'De Dialectica', mit einer deutschen Übersetzung*, Bern, 1981, S. 113.

verbum corde の起源をアリストテレスとストア派に遡るとする。¹²⁾

第四章：内的な声

アウグスティヌスはミラノにおいてプロティノスの『エネアデス』を読んだ折の《ミラノの経験》を『告白』に記している。クルセル (Pierre Courcelle) はその際、三回にわたって失敗に終わった神秘《経験》をもった、と見る。¹³⁾

『告白』7, 9, 16 において言う。以下、訳は山田晶、中公文庫 (II)、一部変更。

そこでわたしは、それら (の書物) から自分自身に立ちかえるようにとすすめられ、あなたにみちびかれながら *duce te*, 心の内奥にはいつてゆきました。それができたのは、あなたが助け主になってくださったからです。わたしはそこにはいつてゆき、何かしら魂の目のようなものによって、その目をこえたところ、すなわち精神をこえたところに、不変の光を見ました。

《ミラノの経験》について加藤信朗に学び、ともに考察しよう。《不変の光 *lucem incommutabilem*》を見る経験をしるすくだりを、「哲学的、宗教的言語の極致ともいえるもの」であり『告白録』の頂点の一つをなす」と言う (『アウグスティヌス『告白録』講義』知泉書館、2006年、p. 172)。では《不変の光》とはなにか。それは、「そういう (普通の) 光ではなく……。それは、油が水の上にあり、天が地の上にあるようなしかたでわたしの精神の上にあったのではなく、わたしを造ったがゆえにわたしの上であり、造られたがゆえにわたしはその下にあったのです」と言われている。加藤信朗は、「これは驚くべき言葉です」と言って、《作りだすものと造られたものという創造と被造の関係》を、あたかもめぐり出すかのように！とりだした。このくだりを経験直後の活きた描写でなく、「その時のことを思い出しながら『いま』これを述べているの

12) Jean Pépin, *Saint Augustin et la Dialectique*, Villanova, 1972, pp. 78-81.

13) Pierre Courcelle, *Les Veines Tentatives d'Extases Plotiniennes*, dans *Recherches sur les Confessions de Saint Augustin*, Paris, 1968, pp.157-167 : Enn. I, 5, 3; 1, 6, 9.

です」と言い（前掲書 p. 175）、回想による叙述と捉える。ソリニヤック（A.Solignac）は、直後の反省と十年後の回顧との双方を含む、と見る¹⁴⁾が、筆者はむしろ、まばゆい光を直視した直後、はるか彼方から聞こえてきた声の一連の経験からさほど隔たらない時期の反省的記述とする。

その続きで言う。

……そのときはるかに高いところから「わたしは大人の食物だ。……食べると言っても、肉体の食物のように、おまえがわたしを自分のからだに変えるのではない。……」という御声を聞いたように思いました。……あなたははるかかなたから「とんでもない。わたしこそは在りて在る者だ」と叫ばれました。その声をわたしは、まるで心に聞くように聞いたのです。

「肉体の食物ではない」という文は、聖餐による供食を暗示する。「わたしこそは在りて在るもの」は、出エジプト記 3: 14 の啓示に由来する。「高いところから……の声を……まるで心に聞くように聞いた」を、高次の空間の象徴的表現とする。

『三位一体』 10, 15, 18 において言う。

それ故ある種の思考は、「ある種の心の奥底が話すこと」です。

Quaedam ergo cogitationes locutiones sunt cordis...

《locutiones … cordis》とは、パリサイ人のつぶやきを読んでイエスが言われた箇所（マタイによる福音書 15: 11 および 18-19）が眼に見えるように示すように、《心の口を開けること》である。単に《言うこと》、《話すこと》ではない。

『三位一体』 15, 10, 19 において言う。

まことに、知っていることによって形作られた思考の働きこそま

14) A. Solignac, *Les Confessions I-VII*, Oeuvres de Saint Augustin, 13, Paris, 1980, note compl. 25.

さに、わたしたちが心の奥底で (in corde) 語る言葉です。その言葉はギリシャ語でもラテン語でも、他のどんな国民の言語でもありません。

北アフリカの港湾都市カルタゴにおける多言語圏の言語環境を背景に、《心のことば verbum cordis》と《諸言語、諸国語、linguae》、ギリシャ語、ラテン語、その他の国語との相違を述べる。諸言語は、ときにインド語、ヘブライ語、フェニキア語などにまで及ぶ。

結 論：

聖心女子大学（東京）の講堂での教父研究会主催、公開講演の後、玄関にあらわれたピーター・ブラウン先生に、「カトーです」とご挨拶すると、先生は若き日の天才的な著作 *Augustine of Hippo* の註に引用された拙論（邦訳、上、p. 297、第五章註 78）、*Melodia Interior: sur le traité 'De pulchro et apto' (Revue des Études Augustiniennes, 12, 1966, Paris, pp. 229–240 所収)* を覚えておられたと見え、邂逅の喜びをあらわされた。続いて「ことばと声に関心をもっています」と申し上げると、間髪を入れずに読むように勧められたのがなんと、『ドルポー説教』3 (293A) であった。このたび、先生の宿題に筆者なりの答案を書いたつもりである。

本稿の論点を次の三点に要約しよう。

- 1) 《ことば verbum》とは何か。あることを言おうと欲して心に孕む。これこそが《心のことば verbum corde》であり、真のことばである。
- 2) 《心のことば》は独語でなくて応答である。
- 3) 《心のことば》は持続するが、《音声》は消え去る。

先生の紹介された『ドルポー説教』3を通じて、アウグスティヌスの思想の中心ともいえるべき《心のことば》に始めてふれたことは、筆者にとり、魂を揺さぶられる、喜ばしい経験であった。

アウグスティヌスの前期の『キリスト教の教え』や『告白』では、《聞く》が《見る》よりも優位を占める。後期では、ことばへの高い評価と対比するとき、声の価値を貶め、低く評価する傾向が現れる。言語神学的な立場をとる『ヨハネによる福音書講解』を分水嶺として《見る》が《聞く》よりも優位に立つ。『三位一体論』では本来の言語哲学

の立場に復帰するだけでなく、より高次元の象徴的観点を取るの
が、前期と後期の間期の時期に、アウグスティヌスの言語観に、なにか
重大な転換が起きていたのではないか。これらの吟味・考察は筆者に課
せられた将来の課題である。

『ドルボー説教』に関する文献表：

一次資料

Vingt-six Sermons au Peuple d'Afrique, édités par François Dolbeau, Paris, 1996, pp.
756.

Sermons Dolbeau 1-10, sous la direction de F. Dolbeau et M. Dulaey avec une équipe
de chercheurs, (Œuvres de saint Augustine, 77/A, Paris, 2020).

Sermons III/11, Newly Discovered Sermons, translation and notes. Edmund Hill, The
Works of Saint Augustine, A Translation for the 21st Century, New York, 1997.

二次資料

Augustin Prédicateur (395-411). Actes du Colloque de Chantilly (5-7 septembre,
1996), édités par Goulvin Madec. Paris, 1998.

付記：今後の課題のひとつについて

12世紀の思想家、アンセルムスは、みずからのべているように、ア
ウグスティヌスに深く学んだ。《verbum cordis》の思想の理解者である
だけでなく、さらに積極的に先に進めた。

では現代の思想家においてはどうか。デカルト以後、フッサール、デ
リダ、ガダマー、リクール。とりわけガダマーの verbum cordis の理解
は傑出している。筆者にとり特に興味深いのはポール・リクールであ
る。彼はアウグスティヌスの言語哲学のよき理解者であるだけでなく、
verbum cordis に依拠する言語観に対して、一定の距離をもち、疑問を
いだし、問いを提起する。われわれアウグスティヌスの研究者も文献学
的、解釈学的、思想史的に、研究する。だがそれだけでなく、批判精神
を堅持して、再度学び、アウグスティヌスの問いに取り組み、応答しな
ければならない。これはわれわれ研究者に与えられた共通の課題である
と思われる。だがそれも、ようやく探求の途次についたばかりである。
友よ、いざ、探求の旅路につこうではないか。